



言葉とジェンダー

高 田 香 奈
たか だ か な

鹿嶋市立鹿野中学校 三年

私は最近、テレビなどで「ジェンダー差別」「ジェンダーフリー」などの性別に関する言葉をよく耳にします。学校でも、道徳の授業などで性別について考えることが増えてきました。「性」の問題について触れる機会が広がっている、よい状況だと思います。しかし、私は性問題について触れれば触れるほど、考えれば考えるほど違和感を持つようになりました。

たまり前だと思っていたことに「女権」という名がつけられていたことが、まるで、「女性に権利があるのは当たり前ではなく特別なこと」といわれているようでした。また、辞書を調べても、男性の権利を表す「男権」という言葉がないことに、ますます女性と男性の差を感じ、ショックを受けました。

ある日、国語の授業で辞書を開いた時のことです。私は「女権」という言葉に目が止まりました。「女性が男性と対等な資格を持つ」という意味です。一見、女性の社会進出を後押しするよい言葉のようですが、私は、女性が下に見られている気持ちになりました。なぜなら、私は今まで、女性と男性は当たり前対等だと思っていたからです。当

私はこのことをきっかけに、日常でも性別について考えるようにになりました。一言一言の言葉に意識を向けてみると、「男勝り」「女子力」「イクメン」と性別へのイメージは日常の生活にあふれていました。特に印象に残ったのは、「女装」と「男装」という言葉です。「男が女の服装をすること」が女装の意味です。「女の服装」とは何でしょう。スカートをはくこと、リボンをつけることでしょうか。好

きなものを身につけ、着ることに「女の服装」も「男の服装」もないと思います。しかし、「女装」も「男装」も今の日本で使われている言葉です。性別で服のイメージが決められてしまっている、ジェンダーフリー や ジェンダー レスとはほど遠い現状が表れています。そして、この状況は服装だけではないと思います。私たちの中にはまだ、深く性別へのイメージが残ってしまっているのではないかどうか。性の問題について考える機会は増えている一方、私たちが使う何気ない言葉で、無意識に「性の壁」がつくれてしまっていると思います。

また、テレビでは「活躍する女性社長」という特集がありました。「男性社長」の特集はないのに、「女性社長」の特集はある。社長という仕事に性別は関係ありません。しかし、この時取り上げられていた方は「女性」ということにはスポットライトが当てられていました。男性と同じ仕事をしているのに、女性が「女性だから」という理由で注目を浴びるのは、男女平等だといえるのでしょうか。私は、「女性が男性と同じように当たり前に働くこと」が本当の男女平等だと思います。

そして、ジェンダーについての話題になる時、よくこんな言葉をききました。「そういう時代だから。」「時代だね。」

様々な人が、「時代」といいます。みんなどこか他人行儀です。本当に、時代が男女平等やジェンダーレスの社会にしてくれるのでしょうか。

言葉の力は偉大です。何気なくおくられた言葉に、傷つけられることもあります。しかし、救われたり、希望を与えてられたりすることもあります。私たち一人一人が今一度、自分の言葉を見つめ直し、ジェンダーについて考える。それが、社会を変える大きな力になると思います。

